

巻頭言

宗学のリアリティ

赤堀 正明

一昔前、追体験という言葉が盛んだった。最近は「くのように」という人がいる。私は日蓮聖人の教えを信仰するが、日蓮聖人のように、信仰できるとは思わない。その教えを自らの業に合わせて、信行するだけである。

四菩薩は地水火風の四大の象徴でもある。異なる特質によって空大である釈尊を助け、その教えを実現するものと考えられる。この事からすると、地涌の菩薩は各々異なる性格・性質を持って、釈尊の教えを助け、法華経の教えを広めていくものと思われる。私は法華経によって、何者となるのか。その事こそが、私の信仰である。

先師の中、僅かに草山の元政は願って母堂の死に遅れ、遷化した。その軌を慕った本妙日臨は鳥の声を解した。一茶の句は芭蕉の句のように詠まれたのであろうか。ロダンはミケランジェロの追体験をしたのであろうか。

現在に至るまでの多くの日蓮宗僧侶は一般社会への訴求力に欠けている。その理由は祖師の亜流と化したことに求められるのではないか。各業は各異の成仏の姿をとるのでなくてはなるまい。このことを私は宗学のリアリティと言ってみる。

カラヴァッジョがシチリアで描いた《ラザロの復活》を見にイタリアを訪れたかったが、コロナ禍で不可能になってしまった。カラヴァッジョは殺人罪での追求をマルタ島に通れてサンジヨヴァンニ大聖堂でこの大作を描いている。晩年（といっても三十八歳で亡くなっている）の深い闇が全体を覆い、粗く早いタッチがカラヴァッジョのリアリテイを生み出している。

その生々しさが我々の気弱な生を呼び醒し、自らの生死を振り返ることを求める。生々しただけならグロテスクに墮ちる。それではカラヴァッジョの生々しさとは何か。真実を描き出そうとする意志の生々しさである。その気憤が、早く粗々しく筆を走らせる。カラヴァッジョを通して真実が顔を覗かせる。

日蓮聖人は宗教の優劣を判断される基準として三証を挙げられている。文証は経文に論拠が証らかであるか立証し、理証は仏教の道理に違っていないか検証し、現証は教説が人々に及ぼす影響を実証する。

この内、現証は感動であるともいえる。六感（正確には五蘊・十二入・十八界）で感じ、魂が揺れ動かされ、生き方そのものをも変えることが現証には含まれるからだ。

私はこれを宗学のリアリテイと呼ぶ。

法華経の文字が日蓮聖人の血肉となって人を動かす、神々をも動かす国土に広がった。大地は揺れ、蒙古は躍った。

リアリテイは生きることの意味を訴求する。生きることを考え、深め、そして意味を与える。日蓮聖人の呼び起こすリアリテイは我々を成仏へと導く。